

第8回 西方音楽祭

「フォルテピアノってどんな楽器？ チェンバロとどう違うの？」

西方音楽館 木洩れ陽ホールは、フォルテピアノやチェンバロが美しく響く空間です。
フォルテピアノのソロ&アンサンブル、チェンバロとの聴き比べ、で、
西方音楽館常設ワルターモデル フォルテピアノの美しい響きを味わってください。

オープニングコンサート

- ◆ 3月19日(日) 14:30 ~ (西方音楽館友の会第102回コンサート)
宇都宮短期大学音楽科 学生による声楽、及びピアノ・トリオのコンサート
秋間 安奈(ソプラノ) 瀬端 あいり(ヴァイオリン) 佐藤 愛雅(チェロ)
益子 徹(宇都宮短期大学音楽科准教授 ピアノ)

宇都宮大学教育学部学校教育教員養成課程 学生による作品コンサート
《郷愁 - オープエとピアノのためのソナタ -》
寺嶋 菜々子(作曲・ピアノ) 福田 愛華(オーボエ)

メインコンサート

- ◆ 3月26日(日) 15:30 ~ 川口成彦フォルテピアノリサイタル
(西方音楽館友の会第103回コンサート)

才能あふれるフォルテピアノ界の若きホープ!!!
第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール第2位、ブルージュ国際古楽コンクール最高位。

- ◆ 4月2日(日) 15:30 ~ 大塚直哉レクチャーコンサート
「フォルテピアノってどんな楽器？ チェンバロとどう違うの？」
(西方音楽館友の会第104回コンサート)

チェンバロの名手大塚直哉氏が、フォルテピアノとチェンバロの魅力の違い等々、
実演を交えて、NHKFM「古楽の楽しみ」でもお馴染みの分かり易い語り口で、お話しさせていただきます。

- ◆ 4月8日(土) 15:30 ~ 国際古楽コンクール<山梨>入賞記念コンサート
(西方音楽館友の会第105回コンサート)

加藤 美季(フォルテピアノ)
なかなか1位を出さない国際古楽コンクール<山梨>で、昨年見事フォルテピアノで1位を受賞!!!
佐藤 裕希恵(ソプラノ) 満江 菜穂子(クラリネット)

- ◆ 第8回西方音楽祭関連コンサート
7月23日(日) 15:30 ~ 七條恵子フォルテピアノリサイタル
(西方音楽館友の会第108回コンサート)
オランダはじめヨーロッパで大活躍のフォルテピアノ奏者 来日!!!

西方音楽館友の会会員募集!

コンサートを主催する西方音楽館友の会では、経済的自立に向かって歩を進めるため、2023年度より会員の種類と特典を変更いたします。ご理解いただき、引き続きご支援いただけますようお願い申し上げます。

- ・A会員 年会費 4,000円 入場料 4,000円→3,500円
- ・B会員 年会費 10,000円 ご招待状年間2枚 入場料の割引(A会員と同じ)
- ・C会員 年会費 15,000円 ご招待状年間3枚 同上
- ・D会員 年会費 20,000円 ご招待状年間4枚 同上

西方音楽館友の会運営委員: 中新井紀子(西方音楽館館長)、岡田龍之介(チェンバロ奏者)、小川和隆(ギタリスト)、木下大輔(作曲家)
高田良久(医師、下野楽遊代表)、中新井諒子(国立音大卒、クラリネット)、永田美穂(音楽学)、山村多恵子(オカリナ奏者)

フォルテピアノ について



17世紀の終わりごろフィレンツェのクリストーフォリという楽器製作者が、指の押し具合でフォルテ(大きな音)もピアノ(小さな音)も出せる鍵盤楽器として発明しました。当時の鍵盤楽器、チェンバロやパイプオルガンは、指の押し具合では音量も音色の変化もほんの僅かしか変えられません。クラヴィコードは、指の押し具合で強弱の加減が出来るのですが、音が小さ過ぎました。途中、ウィーン式アクションからイギリス式アクションに、シングルエスケープメントから連打がしやすいダブルエスケープメントに取って代わり、時代と共に楽器はより大きく、より頑丈なものになり、やがて、「フォルテピアノ」のフォルテの文字が消えて、「ピアノ」という名称になり、現在のピアノに至ります。

第100回コンサートのテーマであるベートーヴェン(1778-1827)は、生涯にわたって、フォルテピアノの発展をそのまま身をもって体験した作曲家です。時代順に製作者の名前で記すとシュタイン、ワルター、エラール、ブロードウッド、グラーフのフォルテピアノを所有し、順に音域が広くなり、楽器も大きくなります。この中でもワルターは大変気に入っていたようです。

西方音楽館常設のフォルテピアノは、A.ワルターが1795年に製作したものを、現代の名工C.クラークが1994年に復元した楽器です。天才的フォルテピアノ奏者故小島芳子さんが愛用していた楽器で、音が大変美しく、海外在住の演奏家もコンサートではこれを指名するほどの銘器です。

ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの中期くらいまでの作品を、ワルターモデルのフォルテピアノで聴くと、表現の幅の大きさに驚きます。ショパンの作品を、例えば、当時の楽器エラール社製のフォルテピアノで聴くと、現代のピアノには無い美しさに魅了されます。フォルテピアノには、現代のピアノからは失われた美しさ、繊細さ、表現力があります。

いつ頃までをフォルテピアノと呼ぶのかは、色々な考えがあるかと思いますが、19世紀半ば頃、楽器が大きくなり、ピアノの弦の張力を支えるために、金属のフレームが使用された辺りが境目の様です。また、これ以前は、弦が平行に張られていましたが、金属フレームの出現辺りからは、交差して張られるようになりました。平行弦の例えば、J.S.バッハ最晩年の頃のジルバーマン製作フォルテピアノでJ.S.バッハの曲を聴くと、各声部が独立して聞こえます。現代のピアノは、弦が交差しているため、声部間の響きが混ざり、各声部の独立が甘くなります。

フォルテピアノについての詳細は、「ピアノの歴史」小倉貴久子(河出書房新書)、「フォルテピアノ~19世紀ウィーンの製作者と音楽家たち」筒井はる香(アルテスパブリッシング)などを、参照なさってください。

[中新井 紀子]